

---

# 異世界の方、いらっしゃい！

砂上 建

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の方、いらっしゃい！

### 【Nコード】

N4946Z

### 【作者名】

砂上 建

### 【あらすじ】

異世界への憧れというものは誰もが持っていたものだ。しかし成長していくと誰もが失ってしまうものでもある。多くの人が異世界というものの存在を気にしなくなったある頃、様々な要因が重なり、異世界の存在を捉えることに成功した。それから時が流れ、街中で普通に異世界人が歩くようになったこの世界で、ある少年に不思議な縁が寄り集まる。

これは、少年？遠原櫟とあはしりくぬぎの個人的な問題の物語である

そういった描写も今後入る予定なので残虐描写ありにしています

## 雨、降り注ぐ（前書き）

警告とお願い：ファンタジーと銘打ってはいますが、ほとんど現代物です。剣と魔法の世界を期待していた方は申し訳ありません。どうかご了承ください。また、誤字？脱字があればどうか教えてください。

## 雨、降り注ぐ

この世界には昔、「異世界」というものへの憧れを持つ人間がたくさんいた。ただ生きているだけののように感じられてつまらない現実、太陽と月が周まわってさえいれば日々なんて勝手に勝手に進んでいく。そこに自分がいるかどうかはどうでもいい。そう思った人間は多く居た。

そして流行ったのがいわゆる「異世界もの」。異世界の住人たちが繰り広げる物語であったり、もしくはそこに現実世界の住人がいたりする話だ。それは現実に退屈たいくつする人たちの心に強い衝撃を与えた。なかには「自分もいつかそんな世界へ行ってみよう」と思うような人も出てくるほどだ。そうしてみな同じような時期に夢から覚めて、現実と正面から向き合い始める。「ああ、そうだったことにあこがれていた時期もあった」と。

その人たちから子供が生まれ、また同じように現実をつまらないものとして見て、異世界へあこがれる。そしてまた、夢から覚さめる。そんなことが何度もくり返された。物語というものはくり返されるうち劣化れっかしていく。異世界を主題にした作品は溢あふれるほど生まれてしまい、一昔前には子供にまで飽きられるようになってしまった。

そうしていつか世界が「異世界」というものに対して何も感情を抱かなくなっていたある時。ある事件が起こった。その年の一年前に行方不明となっていた一人の高校生の少年が、ひょっこりと家に帰ってきたのだ。

アニメやゲームでしか見たことのないようなファンタジックな服

装の男女を引き連れて。

当然、その少年の両親はその人たちを疑った。何しろその頃にはすでに剣を持つて闊歩するような時代錯誤の日本人は居ないし、外国でも当然そんな危険人物はいない。いたとしてもコスプレイヤーだろうが、1年間行方不明だった少年にコスプレ姿でついてくるような空気の読めないやつは恐らくどこにも居まい。両親が少年に、この人たちはどこの誰なのか、ということを探ねると、少年は聞いたことのない国名を言った。両親が首をかしげると、少年は「自分は異世界に行っていて、ちよつとそこで冒険をしていた」などと言った。この男女はその時の仲間だという。それを聞いた両親は最初信じていなかったが、少年はさらに信じられないようなことをした。

少年の手のひらの上に赤い小さな火の玉が浮かぶ。そしてポンツと小さく破裂<sup>はれつ</sup>。それは少年が異世界で覚えた魔術の一つであった。それを見た両親はその場で卒倒してしまつたが、その後少年とその仲間たちが介抱<sup>かいぼう</sup>し、事の説明に一晚かけてようやく両親には信用された。

一方世間では最初は子供の悪ふざけか何かと言われていたが、少年や仲間に話を聞いていた研究者たちが、数年の研究で異世界というものの存在を捉<sup>とら</sup>えることに成功すると、世界中が驚愕した。今まで創作の中でしかないと思われていた異世界の存在が、現実に初めて確認されたのだ。昔、異世界を夢見た者も、当時の若者たちも、みな心踊らせていた。そうして発見された異世界へと渡るため、少年の仲間の協力により、世界を渡るために魔術を使われた初めての機械、ポーターが産まれた。世界で決められた外交のための親善大使と、ポーターの安定のために少年の仲間の一人がその世界へと向かった。数日後、彼らが帰還したときに連れてきた魔女<sup>まじ</sup>？ベアトリス。彼女の力により、我々はより多くの世界があることを知ったの

であつた

大城書店『新現代史』序文より

+++++

「あのさ…古賀先生」

「ん？どうした、遠原？」

6月の下旬ごろ、ある高校の教室でオレ、遠原櫟は、一人の男性教師と一緒にいた。個人授業、というわけではない。ただ中間テストに失敗して補習と相成ってしまったのだ。教師の名前は古賀近実。クラスの担任であり、世界史の授業を担当している。見た目が中年のオッサンなため、このみというカワイらしい名前が台無しとはもっぱらの話だ。

「先生…ちょっと語り口調なのがやけにイラつくから、黙っててくれませんか…？」

イラつくが相手は教師なので一応敬語だ。基本この中年に敬語を使うやつはいないが、望まぬ補習なんていう状況では、相手の機嫌を損ねるのはよくない。

「なんだ遠原、こっちのほう好奇心やワクワク感が溢れてくるだろう？」

「いえ、むしろツツコミたい衝動に駆られました。なんで壮大な物語の序章みたいな語りなんですか」

「いや、壮大だぞ。具体的にいうと、ここから150ページは続く」

「それは教科書の話でしょう!?というか、俺の補習科目は数学です!」

この中年は自分の担当すら覚えてないのかとちよつと不安になる。数学の担当は確か青海おしみという、去年入ってきた背の小さい可憐な女性の先生なのだが……

「しょうがないだろ。青海ちゃんが急用らしいんだから」

「だからって古賀先生が来ることはないでしょう。さっき語つたのも世界史じゃなくて「新現代史」の内容ですし」

新現代史とは、この世界が異世界の存在を知つてからの歴史のことだ。まだそんな頃からは70年近くしか経っていないが、その頃から科学などの新たな発見が山のように見つかり、異世界の人間とのちよつとした交流なども増え、歴史の勉強としてはうつつつけのものとなった。そのところからの歴史を新現代史、それ以前を日本史・世界史として扱っている。それはそれとして何でこんなめんどくさがりに見える中年教師が数学の補習にやってくるのか…と思つてみると、加賀がやれやれ、というような表情をした。

「青海ちゃんはいねえけどよ、ここにいる可愛い近実ちゃんでもあ、我慢してくれや」

「すみません先生、気持ち悪いのでトイレで吐いてきます」

吐かないと体内から腐りそうなので、とは言わないでおこう。中年にはやさしく。しかし教師には厳しく。

「待て。……俺も行かせてくれ。あんなことをいうのはやっぱりやめておいたほうがよかつたな……すまん」

「自分で言っておいて何いってるんですか。許してくれるんならもう今日は帰ってもいいですよね?というか、帰らしてください」

外は生憎あいにく……というか、梅雨なので当然のように雨が降っている。しかも、朝のニュースにでてきた気象予報士からも「満タンのバケツをひっくり返したかのような雨」というお墨付きももらっている



ほどの土砂降りだ。クラスメイトたちが帰っていった時はまだ普通だったが、2時間ほど補習を続けている今は……もう、圧倒的に違う。雨が窓を叩く音がしきりに教室や廊下から響いてくるつてのがおかしい。これ以上強くなられでもしたら、傘も保もたないんじゃないか？

「いや、ダメだ。こつちだつて頼まれたからには最後までやってやらないとな……」

「えー、そりやないでしょう。これ以上雨がひどくなったら傘があつても濡れるかもしれないじゃないですか」

「そりやあ、こつちだつてさつさと終わらせて帰りた」

「……あ」

今気づいた。これ、別に長々と続ける必要はないんじゃないか？担当の教師はいないし、そもそも何か課題が出されてるわけでもない……多分忘れたんだろうな……そうなるということに意味が特に無いうえに二人とも帰りたい……そのことに加賀も気づいたようで一瞬アホみたいな表情になったが、そこは自称「可愛い」近このみ実ちゃん。この場をどうすればいいかすぐに気づいたようだ。「しょうがねえから今日はもう帰れ。日を改めて青海ちゃんの都合がいい日にな」

完全な棒読み、ありがとうございます。この時点でうまくごまかせるかな、という不安な気持ちは吹っ飛んだのでオレもちゃんと返そう。

「え、本当ですか、ありがとうございます」

一瞬、加賀が「お前、そこはもうちよつとがんばれよ……」「みたいな目を向けてきたが、あんたが言うな。気をつけてなー、という声を背中に軽い足取りで傘とかばんを手に取つて、教室を出る。

雨のせいかな雲のせいかな、外は少し暗かった。

+++++

私立深根<sup>みな</sup>魔術高等学校。それがこの学校の名前だ。今はこの魔術学校というのは各地にある。どうやら魔女ベアトリスがこの世界にやってきて始めた事の一つに、魔術の教育というものがあるらしい。異世界との接触<sup>せつしょく</sup>にはどうしても機械以上に魔術の力が必要、ということらしく、魔術を扱える人間を増やすために始まった世界規模のプロジェクトだ。ただ最初は教える事のできる人の数も限られており、少人数のエリート教育だったが、今ではそういった事はなく、こうして普通に私立でも立てることが出来るようになっていく。国立でもエリート主義でもなんでもないので、俺のような奴も通えるような気軽さだ。普通の学校としてもそれなりのレベルであるから、ここを希望する学生も多いという。女子の制服も目立ったりするようなところや、派手なところは無い（とはいっても魔術学校の制服と普通の高校の制服は見た目からして違うが）が、着る者の可愛らしさを十二分に引き出せるため、入学を狙う娘<sup>こ</sup>もいるほどだ。入学はせずに制服だけ買おう、という人のために、制服自体は誰にでも売ってくれるらしい。一応うちにも2着ほどはある……家族のだが、そしてベアトリスがやってきてから変わった事と言えばもう一つ、街並みが少々おかしくなった、というか、コスプレみたいなのが増えた。間違えてはいけけないが、異世界からの来訪者達や、自分の世界から転移してきたやつらだ。コスプレイヤーと間違えらるとてもなく怒るので要注意。どうもこの世界は様々な世界の集まりの中でも中心の方に位置するらしく、色んな世界から人が流れてくることがあるらしい。異世界の人間を元の世界に帰すことは、本人が希望すれば行われる。しかし帰すのは簡単らしいが、こちらの世界の人間が異世界へ行くのは結構難しいようだ。ベアトリスと遭遇して帰ってこられた親善大使たちは結構運がよかった、ということだ。

う。

異世界の話ついでにあと一つ、実は世界自体は色々分かれているが、そこに住む人々はほぼどの世界も同じと言われている。平行世界、というやつだ。たとえばさつき出た少年の仲間だった男女はこの世界ではイギリスのカップルだったらしく、テレビに映ったフアンタジーな衣装を身にまとった自分たちを見て「見るよ俺たちすげえ格好してるぜH A H A H A！」などと言いながらイチャイチャしてたそうだ。爆発してしまえ。ただ、どこの世界も同じ人間じゃない、というわけではなく「元の世界では生きているけど、別の世界では死んでいた（逆も可）」「自分の世界では過去に生まれていた人間or未来に生まれるはずの人間が別の世界では今生きている」なんていうこともあるらしい。

時代を遡れば刀さかを持つていた侍が歩いていて、ということがあったが、今ではプレートアーマーたいけんを身につけ、大剣を背負う人間も珍しくはない。同じ顔の人間は3人いる、という言葉も今となっては3人どころではなく、死語になって久しい。異世界の存在が珍しいのだ、新鮮だのといった気持ちも最近では、今さらという感じがする。もはや今の時代は基本的に異世界すらも当然の存在として見られている。例外もあるにはあるが。

「（別にドライだとは思ったりしないが……あれだけ盛り上がったわりには、一気に冷めたような気がするな……）」

初夏だというのに、雨のせいでの外の空気は冷たく、雨独特の臭いがする。少し嫌な気分で帰る途中、商店街を抜けようとすると、黒いリムジンが横を通った。なんとなく見てみるとスモークを張っていなかったので中に乗っている人が見えた。確かこの前、道のど真ん中にいきなり剣を持って現れて、姫がどうだのと叫んでいた騎士だったか。その時とおなじ鎧よろいを着て車に乗せられていた。

「（鎧を着て車に乗っていた……となるとやっぱり、元の世界に帰るんだろっな……）」

あの時来た騎士の顔と剣には血がこびりついていて。そして、姫がどこにいるかとか聞いてきたりしたらしい。多分彼はここに来るまでに戦っていた。恐らく、『姫』という人物を探し、あるいは救い出すために。そんな大事な戦いから一気に別世界へと飛ばされた彼の気持ちを、悔しいのしろっな、としか自分では測ることはできなかった。

さらに進んでいると、真っ赤な髪の毛の男がエプロンをつけて野菜を売っていた。その髪の色に買物に来たおばちゃんは怯え気味だったが、男の紳士的にしようとして失敗しているが、裏表はなさそうな態度にとりあえず、落ち着いているようだ。

あの男も確か先ほどの騎士のように、この世界に突然やってきた人間だったはずだ。そんな彼が今もこの場にいるのは、この世界にこのことをよしと思ったのしろっな。帰ることも可能だが、こうしてこの地に残ることも可能だ。その場合、保護責任者が必要となるが、それはこの世界の一般市民なら誰だっけ。彼の場合は八百屋の主人だろっ。歩きながら見ていると、男がおばちゃんに傘をあげている。それをもらったおばちゃんが顔を赤らめ……ちっ、ただのフラグ乱立主人公野郎か。爆散しろ。

+++++

商店街を抜け、家の近くの道へとたどり着く。傘ももうほとんど意味がないなあ、などと思っていると、道の向こうから走ってくる

一人の少女が視界に入る。

その瞬間、心のうちにドス黒い感情が芽生え、それが一気に身体中へと伝わっていくのを感じた。

頭が、彼女の存在を認識しようとする。足が、彼女の元へと駆け出ていこうとする。……手が、彼女を捕まえようとする。いったい何がどうなっているんだ？という思考をはさむ暇もない。ただ、必死で黒い感情を抑えようとした。傘を手から離し、「満タンのバケツを思いっきりひっくり返したような水」を一気に身体に浴びる。目を覚まさせるのには顔を洗うのが一番いい。もつとも目がスッキリする。こんな寒い状況だと、雨水もわりと暖かいような気がするな、などと考えられるようになったあたりで、黒い感情は溶けるように消えていった。

「（いつたいたいなんだっただ……？あんなふうに憎むような相手なんていなかったと思うが……）」

考えても仕方ないか、と思考を中断する、というかこれ以上は濡れたくない。濡れた服の洗濯も楽ではないのだ。もう意味があるのかわからないが無いよりマシなので傘をとって、さっさと家に帰ろう……そう考えていると、目の前に、おそらく先ほど向こうから走ってきたであろう少女が息を切らしていた。どこの学校かはわからないが、制服を着ているという事は、学生だろう。なぜか傘を差していない少女の顔を見みると、少女は涙を浮かべていた。雨水と涙でどちらかもわからないほどに顔が濡れているが、嗚咽が混ざり、手で目元を拭う仕草は泣いているようにしか見えなかった。

「遠原……さん」

オレを、知っている？本当に誰だ？こんな子をオレは、知らない。頭の中で知り合いにこんな人はいただろうか、と必死に思

い出そうとするが出てこない。その内、彼女が俺に抱きついてきた。

「遠原さん……お願いです。私を　　助けてください……」  
頭の中に、結局彼女らしき人物が出てくることはなかった

## 雨降って、自乾かす

「た、ただいまー……」

家についてすぐ、できる限り小さな声で、あいつが先に帰っているかどうかを確認する。今の状況においてあいつはいない方が都合がいい。玄関に靴があるか見てみると……あ、ヤバい、居る。しかし今のウイスポーボイスが、聞こえているとは考え難い。今から一気に二階の自室まで行き、服を素早く着替え、居間に行けば、当然帰ってきていたのかと聞かれるだろう。そこで「一応居るかは確認したんだけどなあ」と言っておけば、この場は多分乗り切る事ができる。

よし、それじゃあミッションスタ

「遅かったですね、兄さん」

き、決めようとしたのに……

奥の部屋から目の前にやってきたのは、遠原櫛羽。少し長い後ろ髪を、一本の極太な髪の毛のように縛っており、眉の辺りの高さで綺麗に切りそろえられた前髪の下から見える目は、普段から針のよう

うに鋭い。雨で濡れ濡れな俺を見る今の櫛羽の目つきは、……針山と言われてもいぐらいに鋭さを増している。今にも刺されそうだしっかり者な櫛羽は、こういったことにとても怒りやすい。俺が傘を持って行っているのも知っているので、なんで傘を持っていったはずなのに頭からつま先までこうも濡れているのか、と疑っているだろう。正直に「わざとやりました。てへっ」とか言ったら多分、説教コースになるだろうなあ……

「……兄さん。なぜ傘を持っていきながら、そんなにもずぶ濡れなのですか？」

榎羽のとてつもなく落ち着いた、もしくは冷めた口調が、濡れた体をさらに寒くさせる。ああ……これ、もしかしたらすぐ怒ってるかもしれない。今日は元々、早めに帰ると言っておきながら普段より2時間は帰るのが遅れてるし、夕食の準備だって未だに済ませてない。一応、昨日の内に下準備は済ませてあるが、今の榎羽の料理スキルでは恐らく、うまく出来ないはず。空腹は人をイラつかせるからな……きっとそういうことなんだろう。

とにかくこのまま黙っていても、より立場が悪くなるだけだ。『この後』の事を考えると今の榎羽を怒らせたままというのは非常に悪い。

「……いやな、榎羽。日本男児だんしつてのは、傘なんて差さずに雨の中を突っ走るのがもつともかっこいいと言われていてだな……」

「その、濡れたネズミみたいな格好のどがかっこいいんですか？ 私にはわかりませんね」

「ふっ……違うぞ榎羽。見た目ではない、その魂たましいこそが」  
「そんなことはどうでもいいですから早くシャワーでも浴びてきてくれませんか？ 玄関にずっと立たれていても、靴くつが濡れるだけなので」

そう言っつて榎羽は居間へと戻ろうとする。が、こっちにも言わなくてはいけない事がある。オレは榎羽を呼び止めた。

「待ってくれ、榎羽……ちょっと、人を紹介しなきゃいけないんだ」

「人？ いったい誰です？ 確か兄さんの知り合いの方とはほとんど会ったことがあると」

「あ、あの……お邪魔まじします……」

申し訳なさそうに俺の後ろから、先ほど道で出会った少女が入ってくる。オレと同じもう一匹の濡れネズミを見た榎羽は

呆然としていた



+ + + + + + + + + + + + + + + + + +

「遠原さん…… お願いです。私を 助けてください……」

土砂降りの雨が降り続ける道の真ん中で、オレは一人の少女に助けを求められた。いったいこの娘は？ どうしてオレの名前を？ 考えることは多くあったが、頭が回らない。どうしようかと考えようとしていると、

「くくくしゅん」

目の前の女の子とほぼ同時にくしゃみが出た。

「……………」

「……………」

……とても気まずい。雨を浴び続けていたんだから、身体が冷え切ってしまったとしてもおかしくはないだろう……。それはそれとしてオレはまだいいが、女の子が体を冷やしてしまうのは良いことではない。

「あー…… あのさ……」

「は、はい…… なんですか……？」

彼女が顔を上げてこちらを見上げる よく見れば、この娘、相当な美少女だ。雨で髪が濡れてしまっているが、首にかからないぐらいの薄い茶色のショートヘアであることは分かった。泣き顔も綺麗だったな、と思ってしまったが泣いている顔なんて、そう見ている気持ちのよいものではない。

「とりあえず、ちよつと付いてきて。そこでタオルと…… よかつたら、シャワーとかも貸すから」

「え？ い、いえ、あの…… それは…… ちよつと……」

「ちよつと待った、君、多分勘違いしてる。確かに家に行くけど、

ちゃんと妹もいるから。頬ほおに手を当てて顔を赤らめたりする必要ないからね？」

いきなり顔を赤くしてポツ、となったので一瞬いつしゆん焦りそうになったが、この雨の中だとすぐに頭が冷える。おかげですぐに理由がわかった。出会って早々《そうそう》家に誘って、いきなりシャワーを浴びさせるナンパがこの世にあるわけないだろう……

「……妹、ですか？」

「……うん、まあ、妹。だから君が顔を赤くするような事態はへくちっ！……とにかく一度、身体を暖めよう。じゃないと二人とも風邪ひくと思うから……」

さつきはこんなに寒いと雨水も暖かい、なんて思ったが、今はもう無理だ。そんなこと言える元気なんて無い。頭からお湯を被りた。傘は当然、女の子のほうに持たせることにする。二人ともすでに思いつきり濡れてしまった後だから効果なんてあるんだかわからないけれど、女の子を濡らして帰るなんて……やだ、なんかこの言葉ちよつとエロい……

「それじゃいこう……できるだけ、早く。話もそこで聞くからさ」  
「……妹……妹……？」

……なんだかボーっとしてるな。よく聞こえないけど何か言っているみたいだから意識はあるんだろうけど……しょうがない、手でも引いていこう。

「うーん……いたかなあ……そんな人……」

手を引いていく途中も何か言っていたみたいだけど、やっぱりよく聞こえなかった。

+++++

ここに彼女を連れてくることになった理由をある程度

かいつまんで櫛羽に聞かせる。が、なんだか反応が薄いというか……反応していないような……。試しに目の前で手を上下に動かしたり、頬を引っ張ったりしてみるのが反応がない。あー……いつもの『あれ』か……

「うん、問題なさそうだ。ちょっとタオル取ってくるから待って」

「え？あの……妹、さん……は……？」

「大丈夫。こいつは時折ときおりこういうことがあるんだ。特に悪いことをするわけじゃないから無視していいと思うよ」

「は、はあ……」

バスルームのほうへ行き、二人分のタオルを取ってくる。廊下に水が垂れるのは嫌だが、その辺はあとで雑巾ぞうきんで拭ふいておけばいい。持ってきたタオルを少女に渡して、オレも服を脱がずに拭ける部分を拭いておく。

「あ、ありがとうございます。それでお願いしたいのは」

「いや、その前にシャワー浴びてくれば？体も冷えてるだろうし」

「い、いえ、着替えがないので……シャワーはちょっと……」

「あ、そうか……でも櫛羽の服を、って意識が飛んでるんだった……」

うーむ……よく考えるとこの娘は15歳の櫛羽よりも年上のように見える。サイズが合うかどうかかも心配だ。かといって家にはあとはおレしかいないが……少女に貸せるものといえば大き目のYシャツとトランクスぐらいしかないけれど……だめだな。イメージしてみたがおレの趣味しみじゃないし、櫛羽が目を覚ましたらなんて言うかとなるとここはこうするしかないな。

「名案を思いついた。ちょっとここで待ってて。君が着れるような服を取ってくるから。ちゃんと、女物をね」

「え？妹さんが気を失ってますけど……あ、もしかしてお母さまの？」

「いや、櫛羽の服」

ダッシュで階段を上り、榎羽の部屋のドアを力強く開ける。思春期だからか、13歳ぐらいになったと同時に「兄さんは入っては駄目ですよ？」なんて言われてからこれまで入ることはなかったが、今、再びこの部屋へと入ることにした。…ふむ、散らかってないし、壁にアイドルのポスターを貼ってたりもしないし、友達が来たような跡もない。が、今それはどうでもいい。問題は彼女に着せる服だ！部屋全体を見回すと、目的の衣服なんかが入っているであろうタンスを発見。それに近づき、手を伸ばす。

さて、人が入浴、もしくはシャワーを浴びた場合に必要なのは、当然着替えだ。普段ならその前に着ていた服を着てもいいし、今回のように服が濡れていたりする場合は服も替えを用意しなければいけないが、どちらにしろ、替えなければいけないものがある。

そう、下着だ。それは現代人なら誰だって替える。万が一、普段は替えないといっても、現在のあの雨の中をずっと傘も差さずに走っていたなら、確実に下着も濡れているはずだ……これもちょっとやらしいな。だが、だからこそ、彼女には服だけではなく下着を、必ず下着を持っていかなくてはいけない。こんな空気が冷えきった日に、上下で着けないなんて事は絶対にダメだ。ほら、よく女性性は冷え性だつて言うしね！だからこれはちよつとした紳士的な親切なのだ。きつと榎羽だつて許してくれる。現在の榎羽のスリーサイズを推測するための材料をさがしても、言わなければ榎羽は許してくれる。オレは、榎羽を信じよう。

「榎羽……これはきつと人のためになる。だから何も言わず」

タンスを空けようとした瞬間、わき腹に槍のように鋭く、鉄球のように重いドロップキックが炸裂した。倒れながらも意識が飛びそうになるのを必死で抑えていると、首根っこを掴まれて、部屋の外に放り出された。榎羽め……復活したか。しばらく廊下でボロ雑巾のようになってうずくまっていると、部屋の中から両手で服やらを抱えた榎羽が出てきて、俺を見るなり、

「おや、ゴミクス兄さんではありませんか。居間で正座でもして  
いて待っていてください………すぐに行きますから」  
そういつて下の階へと降りていつてしまった。………どうやらオレ  
はボロ雑巾ではなくゴミクスだったらしい。

+++++

その後、居間に行つたらすでに待ちかまえていた榎羽から、遅い、  
と言われてアイアンクローをもらい、正座で30分ほど説教をされ  
ていると、連れてきた少女からシャワーから上がったことを教えて  
もらい、榎羽から逃げるようにシャワーを浴びに行った。

で、25分ほどたつてシャワーを上がり、居間に行つてみれば…  
…1時間近く前自分に助けを求めた時とは真逆な、敵を見るような  
目で少女がこつちを見ていた。さては榎羽め、さっきのあれの事を  
教えな………？

「………遠原さん、最低さいていです」

「ああ、最低野郎のクス兄さん。ゴミは洗い流せましたか？」

二人のこちらを見る目が、とても冷たい。少女のほうは榎羽と比  
べて、シヨートヘアから出てくる、かわいい女の子らしさから冷た  
い視線も弱く感じるが、榎羽のそれと合わせると、さっきまで熱い  
お湯を被っていたのに恐ろしさで冷や汗が出そうだ。

「………いや、さっきは本当にすみませんでした。どうか許してく  
ださい」

「ふむ。まずは夕食を作つてからですね。その後なら話を聞いて  
あげます………あなたも、それでいいですね？」

榎羽からの提案に少女は不本意ふほんいそうだったが、まあいいです、と

頷いてくれた。

「寛大な処置をありがとう。それじゃあ急いで作ります……はい」  
それにしても、随分と優しい提案で助かった。いつだったかの時みたいに1ヶ月の間、櫛羽の身の回りの世話をするみたいなのじゃなくて本当によかった……さっさと準備に取りかかろう。もう午後七時をまわっている。櫛羽が空腹でキレたりする前に急いで作るか……

+++++

「いただきます」

「い、いただきます……」

午後八時、普段より遅いが、夕食が完成した。少し煮込む時間が足りなかったが、クリームシチューだ。まずは櫛羽が一口、上品そうに食べる。

「……よいですね。合格点です。」

「そりゃ、必死で作ったからな。でもそんな肩肘張らずに、気楽に食ってもいいんじゃないか？」

「いえ、いつもこういう食べ方なので……むしろ兄さんの食べ方がみつともないと思いますが。ご飯ではないのですよ？」

「左手で皿を持ちながら食べても良いのが家庭料理だ。それが駄目ならどこかレストランで食ってこい」

家でまでそんなマナーを気にしてもストレスにしかないだろう、と言ってやりたいが説教くさいから止めておく。自由に食べさせるのが一番だ。

「わざわざどこかの店に行かずとも、兄さんの料理なら充分満足できますよ」

「……へいへい、お褒めの言葉、ありがたく頂戴しますよ」

櫻羽がこちらに笑いかけてくる。笑つてるときは本当に無害なんだよなあ……。しかし、褒められたのは嬉しい。もう一人にも聞いてみるか。

「君は……ど……う……?」

……なんか凄くがつついてる。この娘、多分おしとやかな方だと思っただが……それとも食事のときだけこういう感じだったりするのか?

「……あ、はい、とっても美味しいです!何か特別なこととかしてるんですか!？」

「いや、特にはしてないけど。というか……よく食べるね」

「……あ」

さっきまでとても勢いよく喰らいついていたのに、いま気づいたようだ。顔を赤くして恥ずかしがっている。聞けば、食事を摂るのが1日ぶりとのこと。それなら恥ずかしがることはないと思うが、彼女にとってはどうでもよくないらしい。自分の醜態を思い出してどどん顔が紅くなる。かわいいなあ。

「す、すみません。家にながらせてもらった上にシャワーと夕食まで……」

「頭を下げることはありませんよ。時間も時間ですし、兄さんを頼ってきたのに何もしないまま帰すわけにはいきませんから」

「そうだな。謝ることじゃないと思う。頼るっていつても、結局まだなんのことは聞いてないけど。ねえ……」

あれ?そういえば……

「?なんですか??」

「……そういえばさ。まだ名前聞いてなかったよね?」

「……兄さん。普通は最初に聞くと思いますが?」

「いや、ちよつと間が奇跡的に外れて……そういうことだから、ダメな人を見る目をしないでくれ……」

誰だつてシリアスなところできしゃみが出たら調子は狂うだろうと思っただ。これには少女も苦笑いをしていた。

「そういえば、そうでしたね。本来なら最初に名乗っておくべきだったのに、申しわけありません」

「いや、それは謝……った方がいいかな。礼儀としてはダメなわけだし。それで名前は？」

「はい。私は天木鹿枝あまぎ かのえといいます」

「天木さん……か。それじゃあ天木さん。何をオレに」

「兄さん。まずは夕食を食べませんか？食事の場で話すような内容ではなさそうですし、それにシチューが冷めてしまいますよ」

櫻羽がオレの言葉を遮さへぎるように言った。確かに食事時に事情を聞くのはよくなかった。警察が尋問しんもんをするわけではないのだし、やめておこう。シチューも見れば、湯気が少し薄くなってきたしまっている。

「……それもそうだ。じゃあ、話はこれを食べた後で」

「はい、わかりました」

今は食べることを優先したいのか、天木さんは素直に頷うなづいてくれた。……この娘のことだし、言っておいた方が良さだろうなあ。

「……言わないとやらなさそうだけど、おかわりはしてもいいからね？」

「は、はい……わかりました……」

礼儀正しいのはいいんだけどなあ……打ち解けられるといいんだけど……

この日、シチューの入った鍋の中身はもの見事に空からになった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4946z/>

---

異世界の方、いらっしゃい！

2011年12月19日01時37分発行